

1. 小田急沿線を中心に15か所のママさんバレーほか、幼稚園からお年寄りまで幅広い世代へのバレーボール指導や普及を行う丸山由美さん 2. バレーの三大会と言われるオリンピック、世界選手権、ワールドカップの全てでメダルを取っている。手前はロス五輪の銅メダル。
3. 町田市立総合体育館で町田のママさんバレーの皆さんと。4.5. エースナンバー1を付けて挑んだ2回のオリンピック



丸山(旧姓江上)由美

1957年11月30日世田谷区生まれ。175cm。バレーボール日本リーグでは新人賞、サーブ賞、ベスト6など個人賞14回、Vリーグ栄誉賞受賞。NPO法人日本バレーボール・オリンピックの会副理事長

涙と汗を流したあの場所があったからこそ、今がある。第二のバレーボール人生とても輝いている。

あれから30年。現在は町田を生活圏に、バレーの指導や普及などを精力的に行う。1986年に小田急ジュニアが発足した時に監督に招聘されたことがきっかけで、現在も所属は小田急だ。

「バレーボールは選手の技術、チームワーク、戦術、全てがシシク口して勝利に繋がる奥の深い競技。今、様々なスポーツが盛んな中で、バレーの人氣は当時ほどないし、かつての栄光を知る人も減っている。一時代を築いた者として、バレーの素晴らしさをもっと知ってほしい。だから、最近は色んな人にメダルを見せて、触ってもらうようにしているの。10年くらい前までは実家に置きっぱなしだったんだけど(笑)」

選では勝ちながら、準決勝でそれまで取られたことのないホールディングを取られ、まさかの敗退。自分たちでも何が起こったのか分からなかった。今でもあの試合だけは見られない。」女子バレー、初のメダル無しと報道される中、日本に戻った時、前髪は白くなっていたという。

1984年、ロス五輪にキャプテンとして挑み、3位に終わる。女子バレーボール界史上初の準決勝敗退に、手にした銅メダルは価値がないとまで揶揄された。

五輪後は一度引退するが、低迷していた全日本を立て直すために復帰、2度目のオリンピックにもキャプテンとしてコートに立った。

「準決勝のペルー戦、あの試合が一番きつかった。優勝したソ連に予

「入社した年は先輩たちとは別のコートで基本的なことばかり。日が昇る前から夜遅くまでの練習は辛かったけど『やめたい』と思ったことは一度もなかった。だって自分で選んだ道だったから。」

初年度でリーグ新人賞、翌年のワールドカップで全日本のメンバーに初選出。それからは全日本のレギュラーとして、また日立ではキャプテンとして、女子バレーボール界を牽引してきた。

丸山由美(旧姓江上)さんがバレーボールを始めたのは中学1年生の時。当時の人気漫画『アタックNo.1』に影響されていた。高校時代もインターハイや春の高校バレーで活躍し、1976年、実業団のトップに君臨していた日立に入社する。

時代を彩った伝説のプレイヤー

『東洋の魔女』の金メダル以降、モントリオールまで金と銀だけだった日本の女子バレーボール界。ボイコットしたモスクワ五輪の後のロスとソウル、2回の五輪でキャプテンを務めた丸山由美さんは日の丸と伝統、そして「世界一」というミッションが常に重くのしかかる中で懸命に闘った「世界のセンタープレイヤー」だった。

特集2 丸山由美

